

か。の。か。の。す。こ。し。く。ら。き。み。た。る

〔續古今和歌集^七神祇〕白河院の御時、あらざる外の事によりて、御きそく心よからず侍ける時、唐鏡

を北野の宮へ奉るとて、かゝみの裏に書つけたる、
左京大夫顯輔

身をつみて照しおさめよますかゝみ誰が僞もくもりあらすな

〔曾我物語^二〕たちばなのゆらゐの事

二十一のきみ女しやうながら、さいかく人にすぐれしかば、かやうのことをおもひいだしけるにや、げにもけいかうのみかど、たちばなをねがひ、たんじやうありし事、いくほどなくてわか君いできたり、よりどもの御あとをつぎ、四かいをおさめたてまつる、さればこのゆめをいひおどして、かいとらばやとおもひければ、このゆめかへすぐ、おそろしきゆめなり、よきゆめをみては、三とせかたらず、あしきゆめをみては、七日のうちにかたりぬれば、おほきなるつゝ、しみありいかゞし給ふべきとぞおどしける、十九のきみはいつはりとは思ひもよらで、さてはいかゞせん、よきにはからひてたびてんやと、大きにおそれけり、^{○中}さらばうりかふといへばのがる、なり、うり給へといふ、かうものゝありてこそうられ候へ、めにもみえず、手にもとられぬゆめのあと、うつゝにたれかかうべしと、思ひわづらふいろみえぬ、^{○中}二十一のきみなにてかかひたてまつらん、もとよりまよまうのものなればとて、ほうでうのいへにつたはる、か。の。か。の。みをとりのだし、又からあやのこそで、一かさねそへわたされける、十九のきみなめならずよるこびて、わがかたにかへり、目ごろのまよまうかなひぬ、かゝみのぬしになりぬと、まろこびけるぞ、おろかなる、この二十一のきみをば、ちゝことにふびむにおもひければ、このかゝみをゆづりけるとかや、

〔延喜式^八祝詞〕遷却崇神祭^{○中}略

鏡用法